



II類の濃音化字音素：

「課」、「級」、「氣」、「宅」、「房」、「病」
の場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 車, 美愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004575

Ⅱ類の濃音化字音素

— 「課」、「級」、「氣」、「宅」、「房」、「病」の場合 —

車 美 愛

車(1996b、1997)では、韓国語の濃音化字音素を定義し、そのうちのⅠ類の濃音化字音素について述べた。本稿ではⅡ類の濃音化字音素の一部について考察する。

Ⅱ類の濃音化字音素は、独立の語と結合する場合にのみ濃音化する字音素つまり、複合語成分となる場合に濃音化し単純語成分の場合には濃音化しないという、構造的な特徴を持った字音素である。今回の調査では13個が抽出された。その中で本稿では【課】、【級】、【氣】、【宅】、【房】、【病】の6個を扱うことにする。

1. 【課】／과／

字音素【課】は種々の独立要素と結合して官庁・会社等の業務組織区分の名称を造る用法があるが、辞典の見出しになっている例は少ない。わずかに次のような例が見られる程度である。

(1) 學生一'課(濃音化する例)、總務一課(濃音化しない例)

このような断片的なデータだけでは【課】が果たして濃音化字音素であるのかわからないか判断できない。しかしながら、この字音素は次のような語を形成することができる。

(2) 經理一課、教務一課、交通一課、圖書一課、秘書一課、
庶務一課、輸出一課、施設一課、衛生一課、人事一課、
住民一課、會計一課、厚生一課など多数

稿者の判断ではこれらの語の【課】は濃音化すると思われる。そこで、これを確かめるため(1)及び(2)の例について、ソウルの出身の留学生など12名のソウル語話者を

対象として簡単な調査を行った¹⁾。その結果、例によっては一、二名が濃音化しないと回答している場合もあるが、これらの語すべてについて濃音化するのが実態であると判断できる回答を得た。この結果に従えば、【課】は濃音化字音素の中に含まれる。面白いのは、『民衆』と『三星』が濃音化しないとしている「総務課」もほぼ全員が濃音化すると解釈していることである。

一方、単純語における【課】は濃音化しないのが普通である。したがって、これはⅡ類の濃音化字音素ということになる。

(3) a. 濃音化するもの

考' 課 (成績等を調べて報告すること)、全' 課、
正' 課 (学校の正規の科目)

b. 濃音化しないもの

欠課 (授業等に欠席すること)、告課 (下級官吏が上司に報告すること)、
公課 (官庁が課する税金や賦役)、功課 (仕事の成績、学課)、
工課 (勉強の課程)、闕課 (課業を休むこと)、賦課、所課 (賦課、考課)、
鹽課 (中国の製塩業者と塩商人に課した税)、月課 (毎月決まってする仕事)、
日課、早課 (朝の祈祷)、租課 (年貢、租税及びその割当)、重課 (負担が
重いように課すること)、茶課 (宋・元時代の茶の販売税)

c. 辞典間で表記の異なるもの

分課 (いくつかの課に分けること)

濃音化する例を他から区別する根拠は何もない。したがって、濃音化例は純然たる辞書
的例外として処理するしかない。

2. 【級】 / 𠄎 /

字音素【級】は《階級・レベル》の意味で用いられ、独立要素との結合ではある程度
の生産性を持つ造語成分である。しかしながら、辞典の見出しとなる例は極めてわずか
で次のようなものが見られる程度である。

- (4) 輕量一級、無差別一級、比較一級、重量一級、
中量一級、指導一級、最大一級

これだけでは【級】の性格は明らかにできないので、この字音素についても設問調査を行った(注1参照)。調査対象とした語は次の通りである。

- (5) a. 輕量一級、無差別一級、中量一級、重量一級
b. 라이트一級、미들一級、변명一級、피디一級、플레이一級、해미一級、
c. 50킬로以下一級、72킬로一級、10萬톤一級
d. 國寶一級、大臣一級、首腦一級、元首一級、長官一級、次官一級
e. 比較一級、最大一級

調査対象の全体的印象から述べると、この字音素については、語例別の「ゆれ」よりも個人差による「ゆれ」の方がはるかに顕著である。つまり、語例別に見ると、「輕量級」、「中量級」、「訓級」、「50kg以下級」、「72kg級」については大多数(12名中9名以上)のものが濃音化すると回答しているが、その他の例については濃音化するという回答が半数あるいは若干多い程度である。二つ以上の辞典で濃音化するとされている(5a)の例と濃音化しないとされている(5b)や(5e)の例とを比べても、それほど顕著な差はない。前者の類に対して濃音化するという回答が若干多いように感じられる程度である。ところが、回答者別に見ると、すべての調査例に対してほぼ一貫して濃音化すると回答した者が6名いたのに対して、逆にほぼ一貫して濃音化しないと回答した者も2名あった。調査方法などに不備もあるので信頼性は低いけれども、字音素【級】の濃音化については個人差がかなりあることを強く示唆する結果である。

一方、単純語の成分としての【級】は一切濃音化しない。

- (6) 階級、高級、同級、等級、上級、昇級、雲級、
原級、中級、進級、初級、風級、下級など

したがって、(5)の語例が濃音化すると見なす稿者にとっては、【級】はⅡ類の濃音化字音素ということになる。

3. 【氣】 /기 /

字音素【氣】は意味的に把握しにくい造語成分である。《気配、気運、勢い、気色、気味、気分、気質、気体》など実に様々な、そして多くの場合明確に分析しにくい意味で用いられる要素である。用例の数はかなりあるけれども生産性はあまりなく、固定された表現がほとんどである。

複合語表現の例は少なく次のようなものが見られる程度である。

(7) a. 濃音化するもの

膽一'氣 (胆力)、貧血一'氣 (貧血気味)、殊常一'氣 (怪しい気配)、
精神一'氣 (生氣)、滯症一'氣 (食もたれの気)、炭一'氣 (石炭ガスの
気)、化粧一'氣 (化粧した跡形)、後重一'氣 (便秘気味の重苦しさ)

b. 濃音化しないもの

金一氣 (秋の気配)、雰圍一氣 (雰囲気)、爆鳴一氣 (爆鳴ガス)、
金旺之一氣 (五行の中で金気の旺盛な季節つまり秋)、
中和之一氣 (道理にかなった過不足のない穏やかな人柄)

ただし、固有語との混成語がかなりあり、その場合は例外なく濃音化する。

- (8) 기름一'氣 (肥し気)、기름一'氣 (脂気)、땀一'氣 (軽い発汗)、물一'氣 (水気)、바람一'氣 (風の気配、浮気心)、봄一'氣 (春の気配)、불一'氣 (火の気)、소금一'氣 (塩気)、술一'氣 (酒気)、숨一'氣 (呼吸する息)、시장一'氣 (空腹感)、암一'氣 (嫉妬心)、이슬一'氣 (露の気配)、잠一'氣 (眠気)、장남一'氣 (茶目っ気)、콩一'氣 (馬が元気なこと)、풀一'氣 (糊気、活気)、피一'氣 (血の気)

一方、単純語構成では次のように濃音化しないものの方が圧倒的に多い。したがって、【氣】はⅡ類の濃音化字音素に含めてよいと思われる。

- (9) 感氣 (風邪)、空氣、軍氣 (軍隊の士気)、根氣、冷氣、怒氣、短氣、大氣、
排氣、浮氣 (むくみ)、邪氣、士氣、殺氣、爽氣、上氣、霜氣、暑氣、沼氣 (メ

タン)、水氣、心氣、雅氣、夜氣、涼氣、陽氣、語氣、銳氣、暖氣、外氣、妖氣、
勇氣、陰氣、人氣〔氣概、意氣〕、日氣〔日和、天気〕、一氣、磁氣、才氣、電
氣、精氣、酒氣、春氣、寒氣、香氣、血氣、呼氣、火氣、活氣など多数

単純語成分で濃音化するものとしては次のようなものがある。

(10) a. 濃音化するもの

驚' 氣〔幼児の痙攣〕、狂' 氣、窮' 氣〔困窮している様子〕、
病' 氣〔病気の勢い〕、憤' 氣〔憤り〕、産' 氣、人' 氣、
津' 氣〔粘り気〕、村' 氣〔田舎人氣質〕

b. 辞典間で表記の異なるもの

癩氣〔癩癩〕、困氣〔疲れた様子〕、鬼氣、熱氣、
鹽氣〔塩気〕、潤氣〔色つや〕、蟲氣〔虫腹の気〕

(8)のように固有語との結合がかなり多いということが、字音素【氣】の濃音化の分布を解釈する上で手掛かりになるように思われる。固有語と結合する【氣】は確かに辞典によれば漢字成分であるけれども、普通の韓国人には漢字成分であるとは全く感じられない。それに対して(9)のように濃音化しない表現の【氣】は、ほとんどの場合、それとは異なった別な要素であると感じられる。単語全体としてみれば(8)の語は固有語として感じられるのに対して、(9)の語のほとんどが漢字語として感じられるのである。勿論、そのような語彙層の違いがあって濃音化の有無が生じるのか、濃音化するかないかによって語彙層の感覚の違いが生じるのか、という問題はある。おそらく、その両方が作用しあっていると思われるけれども、語彙層が違うと感じられることは事実である。それを端的に示しているのが、(8)と(9)とを比べてみると「氣」と「水氣」、「氣」と「春氣」、「氣」と「火氣」、「氣」と「呼氣」、「氣」と「活氣」、「氣」と「血氣」のように同じ意味を持つ表現がいくつかある。これらは明示的意味(denotation)は同じであっても暗示的意味(connotation)やニュアンスが異なり、使用される場面も同じではない。この観点から(10)の例を見てみると、どちらかと言えば固有語層に属すると感じられる語がいくつかあるように思われるのである。

4. 【宅】 / ㄗ /

字音素【宅】は本来 [ㄗ] の読みで《家》を意味する要素である。これが [ㄗ] と読まれると《家》に対する丁寧な表現として《お宅》の意味になったり、その家の《奥さん》を表したりする。前者の読みでは勿論濃音化しないが、後者の読みの場合濃音化字音素である。辞典の見出しとなる例は非常に限られているが、独立の語との結合では例外なく濃音化を生じる。

- (11) 寡婦一'宅 (寡婦の尊称)、寡守一'宅 (寡婦の尊称)、大小一'宅 (本家と分家の尊称)、本家一'宅 (妻の実家)、査家一'宅 (嫁または婿の母親)、査頓一'宅 (嫁または婿の母親)、三寸一'宅 (おじの家、おば)、外家一'宅 (母の実家の尊称)、外三寸一'宅 (母方のおじの家、母方のおば)、主人一'宅 (持ち主の家、持ち主の奥さん)、地主一'宅 (地主の家、地主の奥さん)、親庭一'宅 (妻の実家)

辞典の見出しにはならないが、この意味の【宅】には非常に生産的な用法が二つある。一つは「(姓) + 職位名 + 【宅】」の形で《~の家》の意味を表す用法であり、いま一つは出身地の地名に【宅】をつけて《~出身の奥さん》という意味の表現を造る用法である。どちらの場合にも必ず濃音化する。

- (12) a. 社長ㄗ一'宅、金課長ㄗ一'宅、李先生ㄗ一'宅、朴主事一'宅
b. 慶州一'宅、光州一'宅、大邱一'宅、釜山一'宅など

単純語構成の用例はほとんどない。わずかに「寡守宅」、「本家宅」、「査頓宅」の略語として「寡宅」、「本宅」、「査宅」があり、この他に「惣宅」(夫の家)がある程度である。このうち「寡宅」を除いた後三者については三辞典ともに濃音化しないとしているけれども、「寡宅」については『三省』と『三星』が濃音化するとしている。わずかに四例で判断を下すのは危険であるが、一応濃音化しない方が多いと見なして、【宅】はⅡ類の濃音化字音素ということにする。

5. 【房】／방／

《部屋・店》の意味で用いられる字音素【房】は、用例の数はかなり多いけれども新語を造語する能力はあまりない。したがって、用例の多くは古い伝統的な語である。このような場合には濃音化に関して規則性が低いことが予想されるが、事実その通りである。独立の語との結合において濃音化するものとししないものとの割合は大体半々である。

(13) a. 濃音化するもの

居處¹-房 {居室、居間}、工夫¹-房 {勉強部屋}、金銀¹-房 {金銀を加工販売する店}、單間¹-房 {ひとまの部屋}、代書¹-房 {代書屋}、圖章¹-房 {判子屋}、門間¹-房 {門のわきの部屋}、番¹-房 {番所}、祠宇¹-房 {位牌を安置する部屋}、下處²⁾-房 {目上や貴人が泊まっている部屋}、貰³⁾-房 {貸間}、熟手¹-房 {宴会の賄い部屋・調理場}、温突¹-房 {オンドル部屋}、自炊¹-房 {食事の付かない貸し部屋}、傳貰¹-房 {傳貰で借りる部屋}、鬪棧¹-房 {賭博場}、行廊¹-房 {門の両側などにある使用人部屋}

b. 濃音化しないもの

内弓¹-房 {李朝時代に弓矢を製造した所}、祠堂¹-房 {位牌が祭ってある部屋}、舎廊¹-房 {応接間}、使令¹-房 {使令が集まっていた場所}、生果¹-房 {宮殿で茶食煎果等を担当した職所}、承旨¹-房 {王の命令を承る所}、兒童¹-房 {楽工の子弟に音楽教育をした部署}、亞字¹-房 {オンドルの坑道が亜の字形の部屋}、女僧¹-房 {尼寺}、琉璃¹-房 {ガラスの部屋}、知印¹-房 {李朝時代の尚瑞院の別称}、筭子¹-房 {李朝時代の尚瑞院の別称}、判道¹-房 {高僧の部屋の周りの小さな部屋}、風流¹-房 {管弦合奏をした所}、荒貨¹-房 {雑貨屋}

c. 辞典間で表記の異なるもの

妓生¹-房 {芸妓のいる部屋}、旅館¹-房 {旅館の部屋}、壯版¹-房 {オンドル部屋}、解産¹-房 {分娩する部屋}、玄關¹-房 {玄関についている部屋}

一見、濃音化の分布状況は混沌としているように見えるけれども、綿密に観察してみるとかなり顕著な傾向が見られる。(13b)の濃音化しない例の大半は昔の職所の名称で

ある。このような表現は、辞典では上に示したような境界区分を与えているけれども、実際の語感としては複合語というよりも全体が不可分の単純語のように感じられる。つまり、これらの語における【房】は単に語の一部であるだけで、一定の意味を持った構成成分という感じが希薄である。したがって、その意味では、下の(15)に挙げる例と大して変わりがない。これに対して、(13a)の例においては、【房】は《部屋》あるいは《店》といった明確な意味を持った要素であると感じられる。つまり、これらの語は明らかに複合語として分析的に認識されるのである。そして、重要なことはこのような分析的要素としての【房】は、漢字成分というよりも固有語成分のように感じられるという点である。実際、【房】には次のように固有語成分との混成語が多い。

(14) a. 濃音化するもの

가게 一' 房 (店として使われる部屋)、간지 一' 房 (向かい側の部屋)、구두 一' 房 (靴屋)、구들 一' 房 (オンドル部屋)、글 一' 房 (漢文を教える私塾)、다미 一' 房 (畳部屋)、고기 一' 房 (肉屋)、마리 一' 房 (居間の奥の部屋)、며슴 一' 房 (小作人部屋)、살림 一' 房 (住居、居間)、안 一' 房 (婦女子の部屋)、합살 一' 房 (据え付けないオンドル部屋)

b. 濃音化しないもの

각시 一房 (新妻が居る部屋)、갈이 一房 (轆轤で木器を作る家)、글 一房 (居間などについている小部屋)、돌 一房 (石室)、마루 一房 (板敷の部屋)、지대 一房 (布団等を入れる寺の小さな部屋)、춌 一房 (冷たい部屋)、탕 一房 (大きなオンドル石を敷いた部屋)、한 一房 (同じ部屋)

母語話者の直感として、(14)の【房】と(13a)の【房】は明らかに同質のものである。

(14a, b)の区別は、大体、固有語における濃音化の原則⁴⁾に合っていると思われるが、その同じ原理が、一部、(13a, b)の区別にも働いている。例えば、(13b)の「亞字房」や「琉璃房」で濃音化が生じないのは「춌房」や「돌房」の場合と同様の意味関係、つまり〔性質・形状〕や〔材料〕を表す意味関係であるためであると考えられる。

一方、単純語も用例の数がかなり多い。しかし、この場合には濃音化を生ずるのは非常に少なく、濃音化しない例が圧倒的に多い。

(15) a. 濃音化するもの

銀' 房 {金銀細工店}、塵' 房 {商店、店舗}、店' 房 {商店、店舗}、
茶' 房⁵⁾ {喫茶店、賄い部屋}、饌' 房 {おかずを作る部屋}

b. 濃音化しないもの

庫房 {納屋}、空房 {空き部屋}、官房 {官吏が事務を執り宿直する部屋}、
弓房 {弓矢を作る工匠がいた所}、暖房、内房 {婦女の部屋、奥の部屋}、
冷房、茶房⁶⁾ {喫茶店}、同房 {同じ部屋}、洞房 {ねや}、文房 {書齋}、
蜂房 {蜂の巣}、産房 {産室}、山房 {山荘}、書房 {夫}、船房 {船室}、
小房 {小さな部屋}、心房、臥房 {寝室}、乳房、尼房 {女僧の部屋}、
子房、正房 {母屋、本館}、厨房、寝房 {寝室}、筆房 {筆屋}、花房 {花
屋}

ただし、「銀」、「茶」、「饌」には独立の語としての用法もあるから、(15 a)の「銀房」、「茶房」、「饌房」は(13 a)に属すると見なすべきかも知れない。また「繡房」{宮中で装飾品に刺繡を入れた職所}に対しては『民衆』だけが濃音化しないとし他の二辞典は濃音化表記を与えているが、これも「繡」に独立の語としての用法があるから、濃音化するという表記については同様に解釈できよう。

6. 【病】 / 병 /

字音素【病】は極めて生産的な造語成分である。万病と言われるように病気の種類は数知れないほど多い。その一つ一つに名前が付いているのであるから【病】の使用される機会は当然多くなる。病名は、通常、独立の語と【病】との結合によって表されるが、この語類は「開かれた類」であると見なしてよい。この種の語は若干の例外を除いて濃音化する。

- (16) 脚氣一' 病、季節一' 病、高度一' 病、高山一' 病、恐水一' 病、
公害一' 病、狂犬一' 病、急性一' 病、冷房一' 病、老人一' 病、
糖尿一' 病、都會一' 病、慢性一' 病、夢遊一' 病、舞蹈一' 病、
文明一' 病、白血一' 病、婦人一' 病、不治一' 病、象皮一' 病、

先天一'病、成人一'病、小兒一'病、心臟一'病、悪性一'病、
熱帶一'病、熱射一'病、原子一'病、月曜一'病、流行一'病、
潜水一'病、傳染一'病、精神一'病、穿孔一'病、風土一'病、
血友一'病、血清一'病、花粉一'病、後天一'病、黒死一'病、
黒穂一'病など多数

複合語構成では次のように固有語と結合する例も若干あるが、やはり濃音化を生じる。

- (17) 구멍一'病 [穿孔病]、누에一'病 [蚕病]、물림一'病 [はやり病]、
삐침一'病 [はたけ]、술一'病 [過飲による病気]、조름一'病 [ためらい性]、
주춤一'病 [ためらい性]、지랄一'病 [癲癩]

また、身体各部の名称と結合する場合にも必ず濃音化するが、この中にも固有語との混成語がいくつかある。

- (18) 腦一'病、神經一'病、腎臟一'病、心臟一'病、胃一'病、
胃腸一'病、子宮一'病、肺一'病、皮膚一'病
귀一'病 [耳の病気]、눈一'病 [目の病気]、발一'病 [足の病気]、
배一'病 [腹の病気]、코一'病 [鼻の病気]、호흡一'病 [肺病]

独立の語との結合で例外的に濃音化しないもの、あるいは辞典により表記に違いのあるものは次の通りである。

- (19) 微粒子一'病 [蚕の病気の一つ]、斑點一'病、白僵一'病 [蚕の硬化病の一つ]、蛇
状一'病 [全身がはれて蛇形状になる病気]、私傷一'病 [業務上疾患外の病気]、
生殖器一'病、世紀一'病 [当世紀特有の病的傾向、時代病]、兩身一'病 [二重人格
病]、五尸一'病 [邪鬼が付いて生じる病気、狐付き病]、宇宙一'病、立枯一'病
[立ち枯れ病]、赤腐一'病 [養殖中の海苔にできる病気]、停年一'病 [定年退職
者のノイローゼ症状]、學校一'病 [学校でよく罹る病気]、航空一'病、黒痘一'病
[皮膚に黒斑ができ声がしゃがれる病気]

三辞典そろって濃音化しないとしている例には、上に挙げたものの他に「枯葉枯一病」〔草木の葉が枯れる病気〕と「老且一病」〔年老いてうえに病気になること〕がある。しかし、これらは辞典では【病】の前に語構成の切れ目を置いて表記するのが普通であるけれども、その前の要素は独立の要素では決してなく、これは単純語扱いすべきである。

複合語構成成分としての【病】には、次のように、西洋系の外来語（主として人名）と結合する例がいくつかある。例は次のように濃音化するもの、しないもの、辞典間で表記の異なるもの様々である。

(20) a. 濃音化するもの

肝臟 디스토마 一' 病 {肝臟ジストマ病}、뉴카슬 一' 病 {ニューカッスル病}、케슨 一' 病 {ケーソン病}

b. 濃音化しないもの

모자이크 一病 {モザイク病}、바이러스 一病 {ウイルス病}、바젤도 一病 {バゼドー病}、크레틴 一病 {クレチン病}、한센 一病 {ハンセン病}

c. 辞典間で表記の異なるもの

레이노 一病 {レイノー病}、리틀 一病 {リットル病}、베치エ트 一病 {ベーチエツト病}、스몬 一病 {スモン病}、ウイルソン 一病 {ウイルソン病}、콜사코프 一病 {コルサコフ病}、파킨슨 一病 {パーキンソン病}、벨테스 一病 {ベルテス病}、페트 一病 {ペット病}、프랑스 一病 {フランス病}、하이네메딘 一病 {ハイネメディン病}、호지킨 一病 {ホジキン病}

一方、単純語においては圧倒的に濃音化しないものが多い。

(21) a. 連体修飾関係

怪病 {奇病}、奇病、難病、多病、大病、同病、萬病、無病、死病、生病 {過労による病気}、餘病、長病、重病、虚病 {仮病}

b. 動詞目的語関係

看病、救病 {病気を治してやること}、發病、詐病 {仮病を使うこと}、説病 {病状を説明すること}、成病 {病気になること}、侍病 {病人に付き添

うこと)、臥病(病気で床につくこと)、伴病(病気のふりをすること)、養病(養生)、療病(療養)、有病(病気に罹っていること)、罹病、添病(病気が併発すること)、治病(治療)、稱病(仮病を使うこと)、抱病(病気があること)、避病(病気を避けて転地すること)

c. その他

老病(老衰からくる病気)、傷病、衰病(老衰からくる病気)、時病(季節的にはやる病気)、身病(身の病気)、心病(心中の憂い)、熱病、染病(伝染病)、萎病(徐々に衰弱する病気)、利病(利害)、持病、疾病

濃音化するものおよび辞典により表記は異なるけれども、濃音化するとしているものは次のように比較的少ない。

(22) a. 濃音化するもの

疖'病(子供の瘰癧を起こす病気)、狂'病(精神異常)、冷'病(冷え性)、膿'病(蚕の伝染病の一つ)、痰'病(高熱による分泌液の病気)、疔'病(疔気)、眼'病、中'病(思いも寄らない障害)、瘡'病(梅毒)、滯'病(食もたれ)、風'病(神経系の病気の総称)、火'病(心気病)

b. 辞典間で表記の異なるもの

氣病(気病み)、忿病(怒りから生じる病気)、笑病(笑い病)、淋病、蠶病(蚕の病気)

したがって、単純に構造の観点からだけ見れば【病】はⅡ類の濃音化字音素ということになる。しかし、(22)の例をみると一つの共通性があることに気付く。つまり、これらの語はいずれも伝統的な主として漢方医学の病名であり、(21 a, b)のようなタイプの語は含まれていない。(21 c)もまた伝統的な名称であるけれども、しかしその大部分は具体的な個々の病名というよりは病気の種類を表す用語である。また、前出の独立要素との結合例はほとんどが具体的な病名である。これらを考え合わせると、単に構造に基づいてⅡ類の濃音化字音素とするのではなく、意味的側面を考慮に入れ、【病】は具体的な病名を表す限りにおいてはⅠ類の濃音化字音素であると記述することができる。

注)

- 1) この調査は【課】、【級】、【數】に関して設問調査形式で行ったものである。調査対象とした語を漢字表記(あるいは外来語との混成表記)とハングル表記を併記して与え、当該の字音素に関して、濃音化しない、濃音化する、不明の中で三者択一的に回答させるという形式を取った。例えば、「教務一課」については次のように提示し選択肢に丸を付けさせた。

教務課 교무과 [ㄱ, ㅋ, ?]

濃音化の実態を直接調査する方法の一つではあるけれども、種々の不備があったことを認めざるを得ない。まず、回答者の数が少なすぎる。したがって、分布の百分率のような具体的な数字を示すことは控えて、漠然とした傾向の報告だけにとどめた。形式にも問題があると思われる。三種の字音素についてそれぞれ20個前後の語を選び、字音素毎に固まらないようには配列した。しかし、一枚の調査用紙に収めたため字音素毎にまとめて判断することは避けられなかったと思われる。それぞれの語例毎の判断を引き出すためには、例えばカードで各語例毎に提示したり、さらには調査対象ではない語例も適当に混ぜるなどの配慮が必要であろう。

また、同じ調査を文字形式で行なうのではなく音声形式で行なったり、あるいは発声形式で行なえばまた違った結果が得られただろうと思われる。本稿の冒頭でも述べたように、直接的調査方法というのは簡単であるけれども、実際信頼の置ける方法を取ろうとすると非常に難しい。

【級】、【數】(車1997参照)に関する調査結果はそれぞれの項で述べる。

- 2) 本来の読みの 車間 から転じて固有語化した形である。固有語との結合では、その固有語が母音で終わる場合、正書法上いわゆる「嵌入のs」が挿入される。つまり、「嵌入のs」を用いて 車間 と書く。
- 3) 『ハングル正書法』(1988年1月19日文教部告示)第30項によれば、漢字語のうち、「車’間」、「庫’間」、「退’間」および「貫’房」、「數’字」、「回’數」については、固有語の場合と同様、「嵌入のs」を付けて「車間」、「庫間」、「退間」、「貫房」、「數字」、「回数」のようにハングル表記すると規定されている。

本文に挙げる混成語の例についても同様である。

- 4) 固有語の複合語における濃音化については稿を改めて論ずることにするが、ここでは従来の記述の中で最も明快で適切であると思われる鄭國（1980）の説に基づいて、その条件を紹介しておこう。

次のような場合に濃音化が生じる。

- a. 先行語が時間を表す場合

봄 - 비 (春雨)、가을 - 바람 (秋風)、아침 - 밥 (朝御飯)、
어제 - 밤 (昨夜) など

- b. 先行語が場所を表す場合

산 - 달 (山月)、강 - 달 (川の月)、안 - 방 (主婦が起居する内室)、
안 - 집 (母屋)

- c. 先行語が起源を表す場合

남 - 빛 (藍色)、솔 - 방울 (松笠)、눈 - 동자 (瞳、瞳孔)、
초 - 불 (蠟燭の火)

- d. 先行語が用途を表す場合

고기 - 배 (漁船)、잠 - 자리 (寢床)

一方、濃音化を生じないのは次のような場合である。

- a. 先行語と後行語が対等の関係である場合

마 - 소 (牛馬)、봄 - 가을 (春と秋)

- b. 先行語が形状を表す場合

반 - 달 (半月)、설 - 비 (こぬか雨)

- c. 先行語が材料を表す場合

쌀 - 술 (米の酒)、콩 - 밥 (豆御飯)、쌀 - 밥 (米飯)

- d. 先行語と後行語が同格関係にある場合

종달 - 새 (雲雀)、계수 - 나무 (トンキン肉桂)、어미 - 닭 (親鶏)

- e. 先行語が所有者を表す場合

사람 - 집 (人家)、개 - 다리 (犬の脚)、생선 - 머리 (魚の頭)、
범 - 가죽 (虎の皮)

f. 先行語が派生名詞である場合

해 - 돋이 (日の出)、장 - 조림 (牛肉の醬油煮)、논 - 갈이 (田を耕すこと)

5) 차방。漢字の「茶」の読み方に二通りあり、차と다 (注6)がある。

6) 다방

参考文献

- 『국어대사전』李熙承編、民衆書林：ソウル、1991年
- 『세우리말큰사전』申琦澈・申瑢澈編、三省出版社：ソウル、1984年
- 『最新改定三星版 국어대사전』韓国語辭典編纂會編、三星文化社：ソウル、1991年
- 『東亞新 크리운 國語辭典』東亞出版社編輯部編、東亞出版社：ソウル、1985年
- 『朝鮮語大辭典』大阪外国語大学朝鮮語研究室編、角川書店：東京、1986年
- 金 榮起 1975 『Korean Consonantal Phonology』ソウル：塔出版社
- 金 永松 1981 『国語音の研究』ソウル：科学社
- 金 完鎭 1985 『国語音韻体系の研究』ソウル：一潮閣
- 金 鎭宇 1970 「Boundary Phenomena in Korean」
『Papers in Linguistics』2. 1.
- 南 廣祐 1984 『韓国語の発音研究』ソウル：一潮閣
- 吳 貞蘭 1987 「国語複合語内部の硬音化現象」『言語』12. 1.
1988 『硬音の国語史的研究』ソウル：翰信文化社
- 李 秉根 1985 『国語音韻体系の研究』ソウル：開文社
- 任 洪彬 1981 「사이시옷 問題の解決のため」『國語學』10.
- Chung Kook 1980 『Neutralization in Korean: A Functional View』
Seoul: Hanshin Pub. Co.
- 車 美愛 1996 a 「漢字語の濃音化一側音後濃音化の場合」『人文学論集』第14
集、大阪府立大学人文学会Ⅱ
- 1996 b 「現代韓国語の鳴音後濃音化について」『大阪府立大学紀要(人文・
社会科学)』第44巻、大阪府立大学
- 1997 「現代韓国語の鳴音後濃音化についてⅡ」『大阪府立大学紀要
(人文・社会科学)』第45巻、大阪府立大学

許 雄 1984 『国語音韻学』ソウル：正音社

1984 『国語学』ソウル：Seam 文化社

Allen, Margaret R. 1974 Vowel Mutation and Word Stress in Welsh.
Linguistic Inquiry 4.2

Chomsky, N. and M. Halle 1968 The Sound Pattern of English.
New York : Harper and Row

Martin, S. 1954 Korean Morphophonetics. Baltimore: Waverly Press

本稿の内容の一部は朝鮮学会第43回大会において口頭発表した。

(韓国語講師)